



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

2022年度の取り組み

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 陽子, 秋森, 久美子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/00180057 |

2022年度の取り組み

Initiatives for FY2022

JSL・交流委員会 前田 陽子
秋森久美子

要旨

今年度のJSL・交流委員会では、放課後のJSL活動の支援・開催や本校生徒の言語調査、学校間交流や留学生・体験入学の受け入れなどを行った。その中で、高知県立高知国際中学校・高等学校との学校間交流プログラム、国際交流基金日中交流センター主催の「日中高校生対話・協働プログラム」の取り組みについて、その実践内容を報告する。

1章 高知県立高知国際中学校・高等学校との学校間交流

1節 経緯

2014年度より高知県教育委員会からIB研修のため複数教科に教員が本校に派遣され、派遣期間終了後に高知県立高知国際中学校・高等学校（以下、高知国際中・高）に勤務することから、本校と高知国際中・高の両校教員のネットワークができた。これにより2020年度から両校の生徒が交流する機会を提供するために「Glocal Café」と題した学校間交流を高知国際中・高と合同で始めた。第1期は2020年11月～2021年12月にかけて高知をフィールドとして行った。高知と東京を交互にフィールドとして交流を続けることとし、第2期を2021年10月～2022年9月にかけて東京をフィールドとして実施することになった。

2節 実施の概要

第2期は、第1期と同様の理由により対象学年を両校の中学2・3年生とした。第2期の活動テーマとしては、新型コロナウイルスの世界的な流行により開催が1年延期されていた東京2020オリンピック・パラリンピック大会が終了した後の、大会レガシーについて考えるのが時期的にも適当だろうということで、「東京2020オリンピック・パラリンピックのレガシーを考える ～東京2020オリンピック・パラリンピックをどう評価するか～」というテーマのもと活動することとなった。本校から10名(3年生6名、2年生4名)高知国際中から9名(2年生)の参加者を両校混合の3チームに編成し、月1～2回の放課後にZoomを利用したオンラインミーティングと、本校の生徒アカウントを高知国際中の生徒にも提供し定期的なミーティング以外はTeams上でのやり取りにより各グループ活動を実施した。

第2期のテーマは、大会レガシーを「評価する」ことを目指したが、これはMYPのパーソナルプロジェクト(PP)において、「評価する」という項目があることを意識した。本交流がIB校同士の交流であること、MYP段階の生徒が参加者であることから、MYPにおける学びを発展させる機会とするためであった。

3節 Glocal Caféの実施状況

オンライン交流

| | |
|--|-------------------------------|
| 第1回 | 2021年10月11日 16:15～17:15 |
| 交流内容 | 両校校長挨拶、活動の詳細説明、グループメンバーとの顔合わせ |
| 各グループで自己紹介後に、テーマに関連して自分が興味を持っている視点や内容について発表しあい、大会レガシーのどの部分に着目するのかを話し合った。 | |

| | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 第2回 | 2021年11月18日 16:15～17:15 |
| 交流内容 | グループごとにテーマの着眼点を決定、文献調査の役割分担 |
| 各グループでテーマの着眼点を決定し、文献調査の役割分担を行った。 | |

| | |
|--|-------------------------|
| 第3回 | 2021年12月13日 16:30～17:30 |
| 交流内容 | 研修旅行案の発表会に向けた最終打ち合わせ |
| グループごとに調整した時間で、作成したスライドの加筆修正点と各自が発表を担当する部分の確認をおこなった。 | |

| | |
|--|------------------------|
| 第4回 | 2022年1月17日 16:00～17:00 |
| 交流内容 | 株式会社 三菱総合研究所による講演 |
| 株式会社 三菱総合研究所の担当者の方より、オリンピック・パラリンピック大会のレガシーに関する講演をして頂き、レガシーに関する理解を深めるとともに、調査方法について考える機会とした。 | |

| | |
|--|--------------------------|
| 第5回 | 2022年2月14日 16:00～17:00 |
| 交流内容 | これまでの活動報告と今後の活動についての役割分担 |
| 各グループでこれまでの進捗状況を全体に向けて発表し、両校の教員側からアドバイスを受けた。また、次年度5月までに各グループで行うことを把握し、グループ内での役割分担を行った。 | |

| | |
|--|-----------------------------|
| 第6回 | 2022年5月23日 16:00～17:00 |
| 交流内容 | 東京研修旅行での調査対象施設の決定、調査以来文面の作成 |
| 各グループで8月に実施する東京研修旅行で訪問する調査対象先を決定し、訪問・見学の許可を得るための文面作成、連絡方法について確認した。 | |

| | |
|---|------------------------|
| 第7回 | 2022年7月25日 13:00～14:00 |
| 交流内容 | 東京研修旅行の事前ミーティング |
| 8月2日～5日に実施する東京研修旅行についての最終確認を作成したしおりで確認した。 | |

| | |
|--|-------------------------|
| 第8回 | 2022年8月30日 16:00～17:00 |
| 交流内容 | 発表用ポスター及び作成動画に関する打ち合わせ① |
| 本校のスクールフェスティバルにおいて発表する活動内容をまとめたポスターと動画の制作に関する打ち合わせと役割分担を行った。 | |
| 第9回 | 2022年9月12日 16:00～17:00 |
| 交流内容 | 発表用ポスター及び作成動画に関する打ち合わせ② |
| 発表用ポスター及び動画の最終修正のための打ち合わせを行った。 | |

以上の全体活動以外に、各グループが Teams を利用し、チームごとに連絡を取り合って活動を行った。各グループには担当教員を配置し、適宜進捗状況の確認や活動を促すなどの対応を行った。

4節 東京研修旅行の実施(2022年8月2日～5日)と最終報告

東京研修旅行は予定通りの行程(図1)をこなすことができた。全体で見学した施設以外は、各グループが実地調査先として選択した場所を訪問し、自分たちの着眼点に基づく評価に必要な情報の収集、動画撮影を行った。学校交流も一つの要素のため、3日目の夕方に本校に集合し、校内見学とゲームによる交流も実施した。

| 日 | 日程の概要 |
|--------|--|
| 8/2(火) | <p>11:20 高知龍馬空港 → 羽田空港着 → 宿泊施設(荷物を置く) → 国立競技場見学ツアー 国立オリンピックセンター ISS 生徒集合</p> <p>14:30</p> <p>16:00 → オリピックミュージアム → 17:00 解散 → → → 原宿(夕食:各自) ISS 生徒解散</p> |
| 8/3(水) | <p>9:00 新宿駅南口集合 → 各グループで調査(1日) → 17:30 押上駅集合(夕食:ソラマチ内で各自) ISS 生徒解散</p> |
| 8/4(木) | <p>9:00 新宿駅南口集合 → 各グループで調査</p> <p>16:00 → ISS 集合 … 学校交流 …… 17:30 ISS で解散(夕食:大泉学園駅周辺で各自) ISS 生徒解散</p> |
| 8/5(金) | <p>9:00 国立オリンピックセンター 11:00 振り返り終了・解散 …任意のグループで昼食・観光… 14:30 品川駅集合 美術室集合(振り返り) ISS 生徒解散</p> <p>15:55 → 京成線で羽田空港へ移動 → 羽田発 → 高知龍馬空港</p> |

図1 東京研修旅行の行程

各グループの調査テーマ及び主な実地調査先は以下の通りである。ここに挙げられていない施設・設備や公共交通機関なども見学・乗車をしている。

| | | |
|--------|--------|--|
| A グループ | 調査テーマ | バリアフリー・ユニバーサルデザインについて 大会関連施設における医療/健康管理/運営体制について |
| | 主実地調査先 | 東京都 政策企画局オリンピック・パラリンピック調整部 カヌー・スラロームセンター |
| B グループ | 調査テーマ | 日常に潜む大会のバリアフリー |
| | 主実地調査先 | 千代田区役所 政策経営部 総務課 総務係 東京都交通局 総務部 お客様サービス課 広報 東京都多摩障害者スポーツセンター スポーツ支援課 |
| | 調査テーマ | コロナ禍で開催した東京 2020 のレガシーとは？ |
| C グループ | 主実地調査先 | 株式会社 ENEOS 水素事業推進部 千代田区役所 環境まちづくり部 道路公園課 |

8月5日の東京研修旅行の実地調査の振り返りをもとに、9月17日・18日に開催された本校のスクールフェスティバルにおいて、活動内容をポスター及び動画にまとめ発表・報告を行った。以下はCグループが作成したポスターの一部である。

東京2020大会のレガシーとは？

私たちTGIUSSと高知国際はともに国際バカロレア校ですので、IB特有の評価基準「ルーブリック」を作成し、東京2020大会を評価することとしました。右記の表がルーブリックです。

A: コロナによって感染対策が必要になり、接触を減らす目的で、1年延期、無観客開催、我々もたくさんの夢を諦めざるを得ませんでした。

B: 上記の影響で、ENEOSではたけさんのイベントが中止となり、千代田区でも、公共事業の必要性が問われることとなりました。

C: カルチャー面においては、「多様性と調和」のテーマにもみられるように、多様性を重視する社会が、日本にも形成されるきっかけとなりました。トランスジェンダー女性が選手として参加していたのも記憶に新しいことと思います。だれでもトイレを優先的に配備した千代田区のように、「誰一人取り残さない」といった多様性に関する取り組みが、今後一層熟帯するものと思われま。

地球環境などにおいては、水素自動車の普及などにみられるように、世界の基準が「カーボンニュートラル」へと変化していきました。持続可能な社会をつくり、地球全体が幸福に生きていくために、こちらでも「誰一人取り残さない」社会を求められるようになりました。最大多数の最大幸福を求める時代は、もう終わったと云えるのではないのでしょうか。

D: これからの時代は「withコロナ」であり、コロナ禍で延期、無観客開催となるようなことは、今後他の感染症の拡大まで、もう二度と起きないでしょう。歴史的な出来事として記憶されるであろうCOVID-19のパンデミックを象徴する役割は、TOKYO2020のレガシーの一面となるでしょう。また、上記にも書いた通り、東京2020大会を通じた、多様性、カーボンニュートラルの潮流の強まりはこれからも続くと考えられ、東京2020大会は、「誰一人取り残さない」社会の形成に向けて世界が前進するきっかけとなったと云えるでしょう。

| | 基準A 感染対策 | 基準B 大会後の対応 | 基準C グローバルな課題 | 基準D 展望 |
|-----|--|--|--|--|
| 1-2 | ・コロナ禍の開催でのリスクはあまり考えず、大規模な大会に見合わない感染対策だった | ・大会を開催したことで感染者数が大幅に増え、大会内で大規模クラスターが起こった ・コロナの影響で延期・中止したことについての検討・代替案がない | ・環境への配慮などは考えていない ・身体に障がいのある人が利用しやすいためがあるが、不便なところが多い ・多様性に関して、配慮がなく、差別的な部分がある | ・大会中に各企業等が行っていたことは、大会終了後も一切行っていない ・大会中に出てきた課題の把握などはない |
| 3-4 | ・コロナ禍の開催で、最低限の感染対策を行った | ・大会を開催したことで感染者数がかなり増え、大会内で小規模クラスターが起こった ・コロナの影響で延期・中止したことについての検討がされて、代替案がある | ・大会中に環境問題に対して何かしら考えている ・身体に障がいのある人が利用しやすいためがあるが、不便なところが多い ・多様性に関して、一部の人が大会を楽しめるようになっている | ・大会中に各企業等が行っていたことは、大会終了後も継続できている ・大会中のトラブルや変更点などの課題の把握をし、改善策を考えている |
| 5-6 | ・コロナ禍の開催で起こりうることを予測し、出来る限りの感染対策を行った | ・大会を開催したことで感染者数が少し増え、大会内で小規模クラスターが起こった ・コロナの影響で延期・中止したことについての検討がきちんとされて、代替案があり、それを一部実行した | ・大会中に環境問題に対して考えていて、それを実行している ・身体に障がいのある人が利用しやすいためがある ・多様性に関して、ほとんどの人が大会を楽しめるようになっている | ・大会中に各企業等が行っていたことは、大会終了後も継続できている ・大会中のトラブルや変更点などの課題の把握をし、改善策を考えている |
| 7-8 | ・コロナ禍の開催で起こりうることを予測し、それを防ぐ形で感染対策を行った | ・大会を開催しても感染者数に目立った変化は見られず、クラスターも発生しなかった ・コロナの影響で延期したことについての検討がきちんとされて、備えていた。または代替案があり、それを全て実行した | ・大会中に環境問題に対して考えていて、それを実行し、実際にグローバルな課題解決に繋がっている ・身体に障がいのある人が利用しやすいためがある ・多様性に関して、全ての人が大会を楽しめるようになっている | ・大会中に各企業等が行っていたことは、大会終了後も継続できている ・さらにこれからの先のことや今後の展望も明らかである ・大会中のトラブルや変更点などの課題の把握をし、それを大会時の大会や各企業等の継続した活動で改善するようになっている |

参考元・謝礼

- ・ ENEOS株式会社水素事業推進部並びに千代田区環境まちづくり部道路公園課のみなさま、インタビューのご協力、ありがとうございました。
- ・ 画像引用元：「東京2020のロゴやポスター、ブランドデザイン」<<https://olympics.com/ja/olympic-games/tokyo-2020/logo-design>>. 2022年9月14日閲覧。

5節 成果と課題

1. 第2期 GlocalCafé の活動を終えて

(1) 参加者へのアンケート調査の結果

第2期の活動を終えて参加者へ活動に関するアンケートを実施した。IB校による交流であることから、第2期の活動期間中に最も身に付いたと思うIBの10の学習者像について回答を得た。

| 2021年11月～2022年7月までの東京研修旅行に向けた準備期間 | |
|-----------------------------------|---|
| 回答数 | 10の学習者像 |
| 4 | 探究する人 (inquirers)・心を開く人 (open-minded) コミュニケーションができる人 (communicators) |
| 3 | 考える人 (thinkers)・挑戦する人 (risk-takers) |
| 2 | 知識のある人 (knowledgeable) |

| 2022年8月の東京研修旅行期間 | |
|------------------|---|
| 回答数 | 10の学習者像 |
| 9 | コミュニケーションができる人 (communicators) |
| 4 | 探究する人 (inquirers) |
| 2 | 考える人 (thinkers)・挑戦する人 (risk-takers) 振り返りができる人 (reflective) |
| 1 | 心を開く人 (open-minded) |

東京研修旅行の準備期間では、探求する人・心を開く人・コミュニケーションができる人を挙げた参加者が多かった。これは初めて出会った両校の参加者が協力して活動に取り組んだことにより、グループ活動に必要な学習者が意識されたことによると考えられる。自由記述では、「今まで一つの話題に対して熱心に探求することはありませんでしたが、この大きな活動のテーマを決めた際は全力で取り組もうと、たくさんの時間を割いて準備に取り組むことができました。この準備期間の探究心のおかげで東京研修旅行でも良い結果に導くことができました。」「これまでの学校生活などでは対面で会うことが多かったため、今回の交流ではオンライン上で「心を開く」ことができました。」「オリンピックというテーマについて競技という表面的なものだけでなく、それを支えた技術やシステムをエネルギーなど様々な視点から分析できた」などがあつた。

東京研修旅行期間では、コミュニケーションができる人を挙げた参加者が最も多く、これは実地調査の大部分がインタビュー調査であったこと、グループメンバーが対面して一緒に行動しながら活動したことによると考えられる。自由記述では、「もちろん、事前準備でも外部の方々とのコミュニケーションはありました。しかし、実際に会ってのテンプレートのないコミュニケーションは全く別物です。発言に失礼のないように、どのようなリアクションや質問が適切か考えるのも、とても必要なスキルだと感じました」という内容が多く、また、「東京五輪について一見関係なきような部署でも大きな見方をすれば関係があつた。例えばENEOSは一見大会の縁の下の力持ち的な存在であり、大会の外郭に関わることを通じて大会自体を作り上げてきたというレガシーに気づくことができた」のように実地調査によって新たな視点を心得て探究を深める機会となったという記述もあつた。

アンケートの回答から、「GlocalCafé」の目的である両校生徒の交流と課題に取り組む経験の提供を第2期の活動でも実施できたと評価できる。

(2) 活動の振り返り

第2期の活動の振り返りとして以下の3点が挙げられる。

① 第2期の活動内容について

第2期のテーマは「東京 2020 オリンピック・パラリンピックのレガシーを考える ～東京 2020 オリンピック・パラリンピックをどう評価するか～」であったので、レガシーをどの視点から考察するかという事が第2期の活動の要であった。事前準備期間に三菱総合研究所の方からの講演では、ハード(施設・設備)面とソフト(文化・精神・社会への影響)面におけるレガシーという視点を教授して頂いたが、ハード面からレガシーを考える傾向が強かった。本活動参加者の興味・関心や情報の収集、ソフト面のレガシーを評価する手法の難易度なども関係しているが、ソフト面を考えさせる働きかけや実地調査方法の広がりなど、活動を支える教員側の支援が不十分であったことは反省点として挙げられる。

② 参加学年

中学段階の生徒に参加する機会を与えるということで2・3年生を対象としたが、3年生は本校側の参加者のみであったため、高知国際中側の生徒が学年の違いから遠慮する、指示を待つという部分が見受けられた。異学年交流を実施する際に課題となる点ということもあり、今後の実施では同学年で交流することも視野に入れる必要がある。

③ ITスキルやコミュニケーションのツールの設定

第1期からの課題としてオンライン交流の難しさとなった点であった。今回の活動ではポスター及び動画の作成を実施したが、参加メンバーのITスキルの差から東京側の一部生徒への活動内容の負担が大きくなったグループもあった。この点は最初のグループ編成時にある程度考慮できると良かった点である。あるいは、事前にITスキルに関するレクチャーを全体に行うことで役割分担の負担を軽減することに繋がると考える。また、東京側と高知側のグループメンバー間で連絡がスムーズに行かない点も、第1期同様の改善点となった。今後の活動では、グループごとにメンバーで活動日時を調整させるのではなく、両校の教員で調整したうえで活動時間の回数をより増やすことにより、参加者の活動時間を確保することが必要であるといえる。

おおよそ1年に及ぶ長期的な活動となった第2期であったが、第2期の活動については参加者全員が、参加したことで校内の活動では経験できないことを経験でき参加してよかったという回答であった。「これまではこんなにも長期的な課題にグループで探求することはなかったですが、この機会を通して長期的な課題に計画的に進められるようになりました。」「GlocalCaféで学んだ東京五輪の知識が学校生活の学びで活かしたことにびっくりした。また、自分達で探究し、最後までやり遂げる力、そして東京という慣れない土地で生き抜く力も身についた。学校では体験できないし、修学旅行とはまた違うことにたくさん挑戦できた。」という参加者のコメントから、ATLスキルの自己管理スキルの伸長や、MYPにおける学びの発展へつなげられた点が読み取れ、今後も「GlocalCafé」の活動と通じて両校生徒へ交流の機会を提供することが、本校にとってIB校交流の意義であると考えられ継続して実施できるようにしていきたい。

(文責 前田陽子)

2章 日中高校生オンライン交流の記録

1節 経緯

昨年度コロナ渦における生徒の国際交流の取りくみの一つとして、北京市月壇中学と『君の街は。你的城市。One-Day Trip をプロデュース！』プロジェクト」と名付けたオンライン交流（計4回）を実施した。その結果、交流の途中で失敗や挫折があっても、互いにコミュニケーションを工夫して取りあいながら国や文化の違いを乗り越えて何らかの合意点を見出し、「協同」作業しながら One-Day Trip を「作りあげる」その過程の難しさと楽しさの両方を両校の生徒が体験することができた。このプロジェクトの終了後に「もっと相手のことを知りたい」、また、「もっとコミュニケーションを取りたい」という感想が日中両校の生徒から多く寄せられ、国際交流基金の支援も受けて、2022年度も継続して、「汉语×日本語=Future！言葉は私たちの未来！互いの言語で楽しもう！」というテーマで北京月壇中学とのオンライン交流活動を2回実施することとなった。また、その一方で、昨年度に実施した『君の街は。你的城市。One-Day Trip をプロデュース！』プロジェクト」をよりブラッシュアップし、中国の別の地域にある杭州外国語学校と実施する計画も並行して進行していた。年度当初の予定では、一学期は昨年度参加のメンバーを中心とした北京月壇中学との継続交流、二学期からは新たに参加メンバーを募集し実施する杭州外国語学校との新規交流を計画していたが、予想できない中国におけるコロナの状況もあり、二学期は北京月壇中学と杭州外国語学校との両方との交流を行うこととなった。

2節 交流の概要

昨年度9月から3月までの交流で築いた北京市月壇中学との関わりをそれだけで終わらすことなく、未来につなげるために、「汉语×日本語=Future！言葉は私たちの未来！互いの言語で楽しもう！」というテーマを設定した。今回は日中両国の高校生が、お互いの言語でより親睦を深めることができるような交流を計画しあうことを考えた。「中国語だけで交流」と「日本語だけで交流」をする日をそれぞれ設定し、中国語で交流する日の企画進行はすべて日本側の学生が行い、日本語で交流する日の企画進行を中国側の学生が行うこととした。どのような具体的な交流場面が考えられるか、当日参加した日中両方の学生たちが楽しく活動できるようにするにはどのような企画運営がいいのか、どのような言葉をつかって説明すれば相手にとってわかりやすくなるのかを事前に考え準備することにチャレンジする。

杭州外国語学校との交流は、昨年度同様、『君の街は。你的城市。One-Day Trip をプロデュース！』プロジェクト」の実施である。日中両国の高校生がお互いの地域社会や文化についての共通のテーマや共通キーワードを設定し、互いの学校のある地域を中心とした1日の旅行プランをそれぞれグループ（日本の学生2～3名と中国の学生2～3名の混合グループを複数作る）で考え、作成する。その際、日本側は相手の学校のある地域の、中国側は本校の所在地である東京のプランを考える。互いに相手の地元について、調べあい、教え合い、アドバイスをしあいながら具体的な実行可能な旅行プランを作成することに協働でチャレンジする。最終的には実際に中国の学生が作った「東京」を旅行するプランを、日本側の生徒が実際に実行してみてその様子を動画や写真で記録する。同じように中国側の生徒は、日本の学生が作った「中国」の旅行プラン通りに実際に場所を訪問し、その様子を動画や写真で記録し、互いに発表する。

3節 交流の目的

北京月壇中学の生徒たちとは昨年度4回の交流を通じてだいぶ打ち解けてきたので、今回はレクリエーション的な要素を含めつつ、互いの言語を学びながら、イベントを企画し楽しく交流することを目指した。相手を知り、共同でコミュニケーションをとりながら一緒に活動をするを通じて、連帯や協力の意識をより高めることを主たる目的とした。

杭州外国語学校とのプロジェクトでは、互いに相手の学校の地元での一日旅行を計画するためには、単なるインターネットやガイドブックから得るだけの情報だけでなく、必ず相手とより綿密な打ち合わせを重ねていかななくてはならない。日中両方の高校生でそれぞれ協力しながら、各グループが共通のテーマで2つの旅行プランを作りあげていく共同作業の過程で、コミュニケーションを深め、同じ目的に向かって何かを成し遂げる喜びを感じてもらおうことを目指した。

4節 交流の実施状況

4.1 北京月壇中学との継続交流

当初一学期に2回交流をする予定であったが、北京月壇中学がコロナのための休校を余儀なくされ、急遽二学期2回の実施となった。そのため、学校行事との関係で、日時によっては当日出席できないメンバーがでてしまったが、メンバー同士互いに役割分担を調整しながら、実施することができた。北京月壇中学との交流の様子は以下のとおりである。

| 第1回目 | |
|--|--|
| 実施日時 | 2022年 9月27日 16時50分～18時00分 |
| 交流内容 | 自己紹介・担当者によるゲーム進行上のルール説明・ジェスチャーゲームや簡単なテーマの中国語と日本語によるディスカッション・フリートーキング |
| ISS側の企画で実施したが、今回は高校2年生2名に新たに高校1年生のメンバー5人が加わり、彼らが交流の中心を担った。(高校3年生のメンバーは当日のみの参加) 高校1年生のメンバーたちは今回初めての海外との交流ということもあり、慣れずにとまどうような場面も多かったようにみられたが、北京月壇中学の生徒の大いなる協力もあり、何とか臨機応変に対応することができた。題材やテーマの選択が高校生にしてはやや易しすぎた部分もあるが、特に本校の高校1年生の生徒にとっては、企画の段階から、楽しみながら取り組むこともでき、良い経験になった。最初、オンラインでどのようにジェスチャーゲームをやるのか、教員側としては疑問を持っていたが、実際に工夫しながらやっている様子を見て、生徒たちの発想の豊かさに驚かされた部分がある。もともと、今回の交流は2021年度からの交流継続のプラスアルファの要素もあったので、最初から「親睦」を目指し、「放課後の学校」の雰囲気イメージして計画したが、実際は「ワイワイガヤガヤ」の交流になってしまった。とはいえ、本校の生徒たちは十分楽しんでいて、もう少し、中国語でのやり取りがあってもよかったかなとも感じる。 | |

| 第 2 回目 | |
|--|--|
| 実施日時 | 2022 年 11 月 8 日 16 時 50 分 ~ 18 時 00 分 |
| 交流内容 | ゲーム担当者による説明・絵を見てそれが何かをあてるゲームや日本の歌を聞いて曲名をあてるゲーム・中国のスポーツや地名、日本の映画の題名を題材にしたビンゴゲームなどを日本語で楽しむ |
| <p>今回は全面的に北京月壇中学側の企画、司会進行で実施した。これまで、ISS 側がいつも司会進行を担当し、どちらかという、日本側の主導で交流が行われてきたが、今回初めて中国側の企画司会進行で行われたことがとても新鮮で大変良かった。ようやく“相互”“双方向”交流ができたような気がした。北京月壇中学の生徒たちの司会はとてもスムーズで、互いに自由に意見のやり取りをし、堅苦しくない普段の高校生の姿が見られたように思う。フリートークでは、かなりマイナーな話題がとりあげられたりもした。日本の高校生にとっては、中国の生徒たちがタイムリーに日本のことをたくさん知っていることにはかなりびっくりもしていた。これはうれしい驚き、発見であり、中国の生徒たちが身近に感じられた時間でもあった。</p> | |

4.2 杭州外国語学校との交流（2023 年 1 月現在 4 回実施）

ISS 側は高校 1 年生 13 名と高校 2 年生 4 名の合計 17 名が参加を希望し、杭州外国語学校は 14 名の高校生が参加している。ISS の生徒 5~6 名と杭州外国語学校の生徒 4~5 名の混合 3 グループを編成した。それぞれが One-Day-Trip のテーマを「色」「過去・現在・未来」「時食間・食空間」と決定し、各グループが中国と東京の 2 つのプランを考え、旅行を実現すべく準備している。

現時点まで（2023 年 1 月）までの交流の様子は以下のとおりである。

| 第 1 回目 | |
|--|--|
| 実施日時 | 2022 年 10 月 13 日 17 時 05 分 ~ 18 時 05 分 |
| 交流内容 | 学校紹介・グループメンバーの自己紹介・旅行テーマについての話し合い |
| <p>互いの学校紹介の場面から、終始和やかな雰囲気交流が始まった。ブレイクアウトルームで 3 グループに分かれてからも、準備した自己紹介や行きたい場所のパワポを使い、お互いにコミュニケーションを図っていた。全体に連絡するときに、できればゆっくりと日本語で伝えたあと、ISS で中国語ができる生徒が臨機応変に説明をして、よりお互いが理解しあえる場とすべきであったが、この点はなかなかスムーズにできなかった。せっかく ISS には、中国語や英語を話す生徒が多くこの交流に参加しているので、今後必要な場面では、日本語にこだわらず、よりコミュニケーションを取ることをめざして、相手に対する配慮をしっかりとってもらいたいと考えた。時間がたつにつれて互いに親しくなり、話し合いも一層盛り上がり、少し時間をオーバーしてしまいうグループもあった。生徒たちからは「ドキドキしたけれど楽しかった！」「中国語が少しわかってうれしかった」、「次回は楽しみ！」といった感想があがった。Zoom が途中で切れてしまい、何度かつなぎなおしたが、両校の生徒たちは文句も言わず、大変協力的であった。</p> | |

| 第2回目 | |
|--|---|
| 実施日時 | 2022年 10月20日 17時05分～18時05分 |
| 交流内容 | グループの旅行「テーマ」の決定・テーマに即した訪問場所の候補についての話し合い・第3回オンライン交流までにISS側と杭州外国語学校側で準備しておくことの確認・電子掲示板の使い方の共通理解 |
| <p>今回はほとんどが話し合いの時間となった。第1回交流から1週間後の実施で、あまり間隔がないということもあり、ごく自然な流れで各グループはそれぞれの話し合いに入った。話し合いでは日本語はもちろん、時に英語や中国語を使用しながら、旅行のテーマについて互いに調べてきたことや、知っていることを、意気揚々と話し合っていた。第1回目の時の反省を生かして、日本語にしろ、英語にしろ、中国語にしろ、相手がちゃんと理解しているかを確認しながら、ゆっくりと、時には易しい言葉に言い換えて、話し合いに参加している生徒が多いように感じた。3グループとも、テーマの決定をし、最後に全体にそのテーマを選んだ理由とともに全体に紹介しあった。グループごとに個性があり、とても興味深かった。両校の行事の関係で第3回の交流は約一か月後の11月24日に設定されている。かなり時間があいてしまうので、その間に互いに積極的に電子掲示板でやり取りすることを確認し、楽しい余韻を残しながら、今回の交流を終えた。終了後早速、ISSの生徒たちは今日の話し合いの記録をPadletに挙げていた。</p> | |

| 第3回目 | |
|---|---|
| 実施日時 | 2022年 11月24日 17時05分～18時05分 |
| 交流内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・旅行時に使用するパンフレット作成に向けてのグループごとの話し合い ・テーマを踏まえたパンフレット作成に向けての基本的な内容の共通理解 ・杭州と東京の旅行プランの実現性の確認 |
| <p>各グループとも、かなり具体的に活発に話し合いが行われた。あるグループは杭州側から練馬周辺を中心とした計画を提案されたが、もう少し旅行地域を練馬以外に広げた計画に変更してもらうため、盛んにコミュニケーションをとりながら、より具体的に話し合っていた。予算をどのように効果的に使うか、また、どのような順序で旅行することが合理的かなど…それぞれの学校がある地域について、より詳しいことを互いに知らなくてはならず、各自が英語、日本語、中国語を駆使していた。パンフレットに関しても、互いにアイデアをだしあっていた。ISSの各グループに中国語ができる生徒が1～2名いるため、中国語ができる生徒はどうしても中国語を使う場面が多くなることもある。その際同じグループの中国語の分からないメンバーへの配慮が足りなくなるシーンも見られたので、その点は今後、十分に注意させたい。</p> | |

| 第4回目 | |
|------|--|
| 実施日時 | 2022年 12月1日 17時05分～18時05分 |
| 交流内容 | 各グループのコースとテーマとのかかわりについてのISSと杭州外国語学校それぞれの発表・パンフレット制作に向けての具体的な話し合い。「統一感」をどのようにパンフレットで表現するか、パンフレットの中に必ず入れる基本的な内容をどうするかを検討。ISSと杭州外国語学校の共同でパンフレット作成をするためのCanvaの使い方についての説明 |

Canvaの使い方についての説明をしていくうちに、日本と中国では一緒に作業できないことが判明したが、どうすればうまくデータのやり取りを含めた交流を実践していけるかを検討した結果、WeChatを適宜利用することにした。幸いISS側の生徒数名がアカウントを持っており、またそれらの生徒がそれぞれのグループにいたことで、ISS側が冬休みをむかえても、データのやり取りができることがわかり、皆ホッとしていた。生徒たちの助けもあり、臨機応変に対応することができた。交流を継続していると、「これはどうしよう、困った」という場面が必ず出てくるが、教師も生徒も、それらに直面した時に、少しでも良い方向へ向けられるよう模索しながら取り組んでいる。生徒からのアイデアもどんどんでて、生徒から学ぶことも多いと感じた。また各グループの発表からは、生徒たちがこの交流を「楽しんでいるな」という様子が感じられた。

5節 交流の振り返り

今年度の北京月壇中学との2回の交流では、それぞれ1回ずつ企画と司会進行をISSと北京月壇中学が担当した。これまでは日本の国際交流基金の支援ということもあり、どうしても日本側が企画を主導する場面が多かったが、今回はあえて2回のうちの1回を北京月壇中学に企画司会進行を全面的に任せた結果、同じ高校生同士、より柔軟な交流、互いを身近に感じられる交流を行うことができたように思う。昨年同様、実際のオンライン交流実施までに、事前準備として参加生徒同士で何度も話し合いの場を持った。特に今回は昨年度に参加していない高校1年生のメンバーが主体となったので、交流の在り方をイメージするのが大変そうであったが、昨年度経験者の高校2年生2名が中心となり、話し合いを進めていた。教師側はできるだけ見守る側、サポートに徹した。学校のTeamsを活用し、異学年でもいつでもメンバー同士が連絡取れる環境を作り、疑問点や学んだことをすぐに共有できるようにした。実際のオンライン交流の場面では、今回は企画の段階から教員主導ではなく、司会進行運営などもすべて生徒に任せた。生徒たちはゼロから企画する楽しさと難しさの両方を感じていたようである。交流をする際、同じ体験を共有することはとても大切である。自分たちが企画をどうするか悩んだ経験は、相手がたてた企画に対して、相手の立場を尊重する気持ちが持て、より協力できる。その点において、互いの学校が企画しあい、進行するという今回の双方向でのオンライン交流はとても有意義だった。「国が違って、普段の仲間と接するときと同じように、相手に対する配慮、寛容の心を持つことは共通であること」も、今回の交流で学べたのではないかと考える。

杭州外国語学校との現在進行中の交流では、同じテーマで北京月壇中学と実践した教師側の昨年度の経験が今回の交流に大いに役立っている。昨年度の反省点として、交流相手学校との綿密な打ち合わせが必要だと痛切に感じていたが、今年度は杭州外国語学校の林光志先生と事前にプロジェクトの内容と進め方について、学校として「できること、できないこと」をあらかじめしっかりと話し合うことができたのは、とても有意義だった。また、交流を実施したその日のうちに、林先生と次回の内容等についての相談が定期的実施できているのも、大変効果的である。昨年度同様、中国のコロナの状況で計画を変更せざるを得ないときもあったが、その都度、林先生と協力し、臨機応変に対応している。ISS側のこの交流への参加生徒は、意欲的な希望者を全員受け入れた結果、昨年度の3倍近い17名である。当初の予想より多い人数となってしまったが、今のところ大きな問題もなく、交流が進行している。年度末までにあと2回（計6回）の交流が予定されている。

本年度、海外との交流の機会が少しずつ復活してきたとはいえ、まだまだコロナ以前に比べ少ない。本校には中国にルーツがある、あるいは、保護者の仕事の関係で中国に長期滞在していた生徒も各学年に複数在籍している。中には、将来中国の大学に進学することを考えている生徒もいる。これらの生徒たちにとっては、日本に居ながらにして、中国の高校生とリアルタイムでつながることのできるこのオンライン交流の機会は、大変得難い貴重なものとなっている。また、本校では第二外国語の授業が高校1年生（4年）、2年生（5年）を対象に週に1回2時間あり、毎年中国語を選択する生徒がいる。この交流は、彼らが抱く中国への興味関心を高める良い機会にもなっている。

（文責 秋森久美子）

Initiatives for FY2022

Abstract

This year, the JSL and Exchange Committee supported and held after-school JSL activities, conducted a language survey of our students, and accepted inter-school exchanges, foreign students, and trial enrollments. We will report on the implementation of the inter-school exchange program with Kochi Kokusai Junior and Senior High School, and the Japan-China High School Student Dialogue and Collaboration Program organized by the Japan Foundation China Center for Chinese-Japanese Exchange.